

●楠正行くすのきまさつらかるた

 <p>は</p> <p>はるか金吾山に          石を構えた正行          九州甌島の落人伝説</p>	<p>は はるか金吾山に石を構えた正行 九州甌島の落人伝説</p> <p>四條畷の合戦のおり、正行は難を逃れ鹿児島島の甌島に入り、中甌の金吾山に石を構え、この地で没したとの正行の落人伝説があり、村人たちによって正行の墓が祀られています。</p> <p>島内に楠家子孫の和田家があり、正行の墓は菊水紋の和田家の墓の隣に立っています。また、和田家には櫻井の駅の小刀や正成の「非理法権天」の旗印、緋威の鎧などが伝えられたといいますが、今その所在は不明です。</p>
 <p>ひ</p> <p>ひやくよんじゆうさんにんさいご          百四十三人最後まで          共にと名を連ね如意輪寺          本堂に過去帳納め</p>	<p>ひ 百四十三人最後まで共にと名を連ね 如意輪寺本堂に過去帳納め</p> <p>四條畷の戦いを前に吉野を訪れた正行は、後村上天皇に別れの挨拶を終えた後、如意輪寺に詣で正行と同行する143名の武士一人一人が自らの手で過去帳に名を記すことで、自らの死を覚悟して戦いに挑む決意を明らかにし、その過去帳を如意輪寺本堂に奉納しました。</p> <p>143名の中には、正時、正家、賢秀、新兵衛、関住良圓、三輪西阿、安間了願、青屋刑部らがいました。</p>
 <p>ふ</p> <p>ぶんか 文化6年、          正四位下檢非違使兼          河内の守楠公碑建つ</p>	<p>ふ 文化6年、正四位下檢非違使兼河内の守楠公碑建つ</p> <p>正行は生前正四位下という位を受けていました。小楠公墓所境内の一角に「正四位下檢非違使兼河内の守」楠公碑が建立されており、高さ182センチ、幅103センチの、その石碑の4面に約2000余りの文字が刻まれています。</p> <p>そして、吉野郡上北山村には正行を祭神とする四位殿神社が祀られており上北山村では正行を“四位殿”と崇敬しています。また、八尾の恩智左近の末裔が住み着いたといわれる恩智の里も残っています。</p>
 <p>へ</p> <p>へんがく 扁額の裏書きに          正行の直筆残る          建水分神社</p>	<p>へ 扁額の裏書きに正行の直筆残る 建水分神社</p> <p>建水分神社の扁額の裏面には正行が直筆した文字が記され、現存する最古の正行公直筆の文字とされています。</p> <p>扁額は今も建水分神社の社務所に社宝として非公開で保存されています。この扁額は木額ですが、現在鳥居にかかっている扁額は金銅製のレプリカです。宝永2年1705、前大納言葉室頼考卿がその聖筆をなぞり模倣したものです。</p>
 <p>ほ</p> <p>ほうきやういん ふたつの墓          宝篋院に二つの墓          亡きあとは並びたいと          足利二代将軍</p>	<p>ほ 宝篋院に二つの墓 亡きあとは並びたいと足利二代将軍</p> <p>正行は敵にも畏敬を受けていました。正行の首は黙庵禅師によって京都宝篋院に葬られました。</p> <p>そのことを知った足利家二代将軍義詮は、「正行は立派な武将。私が死んだら正行公の墓の隣に葬ってくれ」と黙庵禅師に頼んでいました。</p> <p>宝篋院には敵、味方二つの墓石が並び立ち、敵にも評価され、武将として畏敬を受けていた正行を知ることでできる場所です。</p>

●楠正行くすのきまさつらかるた



ま

ま まさつらぼ 正行墓「從三位正行」  
 揮毫の者は明治の元勳  
 大久保利通

ま 正行墓「從三位正行」揮毫のものは 明治の元勳大久保利通

江戸時代まで、小楠公墓所は楠塚と呼ばれ、10メートル四方ほどの墓所でしたが、明治に入り、正成を祭神とする湊川神社の創建がなされると、この頃の建碑運動に小楠公社創建の運動とも関わり、墓所の拡張運動がおこり、明治8年1875に着工、明治10年1877に現在の約108メートル四方の小楠公墓所が完成しました。  
 総高さ7メートル50センチの巨石碑で、「増從三位楠正行朝臣之墓」と文字が刻まれ、明治政府の実力者、大久保利通の揮毫によります。



み

み みぎて 右手に筆  
 ひだりて 左手に矢立持つ  
 飯盛山頂の 正行像

み 右手に筆左手に矢立持つ 飯盛山頂きの正行像

昭和初期、大阪を中心に楠公父子の像の建設が各地の学校で行われ、大阪府内76校に、実に77体の楠公像(正成像、正行像、父子像)がありましたが、今残る正行像は星田小学校(交野市)の一体のみです。  
 飯盛山頂上に立つ小楠公像は、右手に筆を持ち、左手に矢立てを持つ凛々しい姿で、四條畷の合戦前に如意輪寺を訪れ辞世の歌をしたための姿を描いたものと云われています。刀を持たず、筆と矢立てを持つ姿は、まさに文化人・教養人・宗教人としての正行を象徴する銅像と云えます。



む

む むかん 無官の正行15歳  
 よしのちよう 吉野朝 檢非違使  
 さえものじよう 左衛門尉を与える

む 無官の正行15歳 吉野朝檢非違使左衛門尉を与える

延元元年1336、湊川の戦で父、正成をなくした正行は、11歳で楠家の跡を継ぎ、頭領となりますが、具体的な事績はほとんど残っていません。  
 延元4年1339、後醍醐天皇が崩御し、後村上天皇が即位した後、正行への信任が深まり、興国元年1340、正行15歳の時後村上天皇より左衛門尉・檢非違使に任じられ、正式に官途に就いた記録が残ります。



め

め めぎ 目指す四万の敵  
 あいて 相手に一千騎 四條畷に  
 きくすい 菊水の旗掲げて

め 目指す四万の敵相手に一千騎 四條畷に菊水の旗掲げて

菊の紋は天皇家の家紋です。正成が使った紋は「菊水」といわれており、これは忠義に篤い正成を讃えて後醍醐天皇が菊の紋を下賜したことによります。  
 正成は天皇家の家紋などあまりにも身に余ることだと思い、菊の花が川の流にゆっくり身を任せているような美しい家紋を使うようになったのです。  
 この菊水の旗を掲げて、正行は四万の敵相手にたった1000騎の兵で、四條畷の戦いに挑みました。



も

も もろなお 師直の悪行  
 みぬ 見抜いた正行に  
 すく 救われ慕う弁の内侍

も 師直の悪行見抜いた正行に 救われ慕う弁の内侍

後醍醐天皇が京都を逃れ吉野に入ったときに付き従った女官の1人に、公家日野俊基の娘、弁の内侍がいました。  
 この弁の内侍はたいそう美貌で、足利幕府の執事、高師直が横恋慕することになり、偽手紙を送りつけ拉致しようと企てます。その時、丁度吉野朝行在所へ参内する正行が遭遇し、拉致されようとしていた弁の内侍を救い出し、吉野まで送り届けました。  
 後に2人の事を知った後村上天皇は、弁の内侍を正行の妻にと薦めますが、近い日の戦いを覚悟していた正行は辞退をするのでした。

●楠正行くすのきまさつらかるた



や

討ち取れば  
偽り者の罠にはめられ

や

やっと追い詰め

や やっと追い詰め討ち取れば 偽り者の罠にはめられ

四條畷の合戦は、第1期野崎、縣下野の守率いる3200騎を撃破し、第2期北条、武田伊豆の守率いる1000騎と大激戦を繰り返す。ここで大塚惟正率いる後陣が総崩れとなり、残るは正行隊300余騎となります。

北上した正行は、南野に構える三陣と相次いで戦い、正行の槍隊、賢秀の薙刀によって突破しました。そして第4期、中野の本陣に迫り、正行が師直と名乗る大将を討ちとるも、上山六郎座衛門の偽首でした。正行は「敵ながらあっぱれ」と、その首を丁重に扱いました。



ゆ

須々木四郎に痛手負い  
正行最期を覚悟

ゆ

弓の名人

ゆ 弓の名人須々木四郎に痛手負い 正行最後の覚悟

中野で挙げた師直の首が偽首と知り、落胆するも、態勢を立て直そうと南下する正行隊に、雁屋で、すすきの陰に隠れた師直の弓隊、その中心にいた九州の強弓の名人、須々木四郎の放った矢が、正行、正時にあたり、傷を受けます。

左右の膝頭を3カ所、右の頬、そして左の目尻に矢を受けた正行は「正時。もはやこれまでか。」と云い、眉間と喉のわきを射られた正時も「兄上。無念。」と、力尽きることになりました。



よ

往生院から馬懸ける  
いざ四條畷 本陣

よ


吉野を出でて

よ 吉野を出でていざ四條畷 本陣往生院から馬懸ける

いよいよ、正行最後の戦いが始まりました。吉野如意輪寺に詣でた正行は、覚悟の軍を吉野からいざ四條畷へと進めます。

正平3年1348、正行は年が明けると全軍を河内東条に集め、出陣を宣言しました。精兵1000騎を前線に、そして弟正儀を筆頭に、河内東条留守部隊に約2000名を残し、一部槇尾、吉野山にも兵を配置する周到さで、堂々と出陣し、東大阪市六万寺、河内往生院に本陣を置きました。

1月5日の早朝、河内往生院を発した正行隊は巳の刻、午前10時、野崎で第1期の衝突をします。



わ

噛みついて敵を離さず  
齒神さん

わ

和田賢秀

わ 和田賢秀 噛みついて敵を離さず齒神さん

正行の従兄弟、和田賢秀は、四條畷の合戦で活躍します。申の刻午後4時を過ぎて薙刀を杖代わりに師直本陣深く入り込みますが、幕府方に投降した湯浅太郎左衛門に見破られ、首を獲られてしまいます。

その時、賢秀は大きな眼を見開き、その眼は最後まで閉じずに敵を睨み続けました。湯浅は賢秀の見開いた眼の恐ろしさに脅えたまま、その数日後に落命しました。

このことから賢秀の墓を「齒神さん」と呼び、多くの人が参るようになりました。



ん

楠木の二字子、正行は楠の一字になせり

ん

ん、父、正成は

ん ん、父、正成は楠木の二字 子、正行は楠の一字になせり

『楠木』か『楠』かの表記の違いについては、諸説があります。しかし、太平記や大日本史、日本外史、梅松論などの諸本はすべて楠の一字字を使っています。楠妣庵観音寺には、久子の方が、正成亡き後楠木の二文字を楠の一字字になせり、と伝わっています。

明治に入り、一部学者によって楠木の表記が正しいとされ、教科書や学術書には楠木と表記されましたが、今は、楠の表記が定着・流布しています。

●楠正行くすのきまさつらかるた




ら

らつ腕夜襲  
ゲリラ戦法  
敵の虚をつく藤井寺の戦い

ら らつ腕夜襲ゲリラ戦法 敵の虚をつく藤井寺の戦い

楠兵法は少数で大軍を相手に戦うゲリラ戦法が中心です。  
正平2年1347、8月に始まった一連の戦いの中で、細川頼氏約3000の軍と藤井寺で戦いました。もはや襲ってこまいと陣で寝入っていた細川軍の虚を突き、山中に多くの松明をともし、その灯りをバックに夜襲をかけたみごとな作戦で細川軍を撃退しました。  
藤井寺の戦いで敗戦を期した足利方は、細川頼氏に加え、山名時氏の軍を動員し、11月、住吉天王寺での戦いへと発展します。



り

良妻賢母の  
四條啜学園  
久子の方  
祀る 御妣神社ありて

り 良妻賢母の四條啜学園 久子の方祀る御妣神社ありて

明治に入ると、湊川神社の創建にはじまり、四條啜神社を含む多くの神社が全国に建立されていきます。  
四條啜では、正成亡き後、正行、正時、正儀らの兄弟を正しく導き、正統な朝廷を支え続ける立派な武将に育て上げた久子の方を慕う、地元の夫人たちの強い願いにより、女性の鏡・子育ての神として御妣神社が創建されました。  
久子の方を祀る御妣神社がある故、女性教育・良妻賢母を校風とする女学校、四條啜学園がこの地に誕生しました。

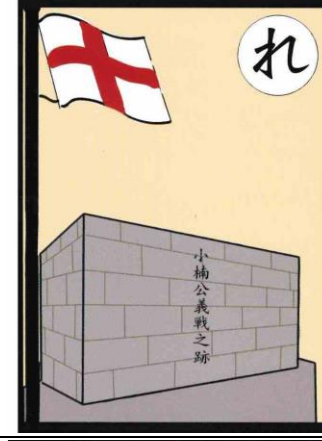


る

留守まもる  
正行後見役  
恩智左近は楠氏八臣

る 留守まもる正行後見役 恩智左近は楠氏八臣

恩智左近は楠氏八臣の1人で、八尾に城を構えた武将です。  
櫻井の駅で正成が正行の後見役としてつけた武将で、湊川の戦い直後足利方との攻防戦に明け暮れた戦乱では、陣頭指揮を執りました。  
八尾は足利からすると攻略の最前線、また楠氏からすると防衛の最前線に位置し、両陣営にとって重要な戦略的位置を占めました。恩智左近の一族末裔は、その後、逃れて上北山村に移り住んだと云われています。



れ

列国の正行美談で  
賛同を得 念願  
かなって赤十字入り

れ 列国の正行美談で賛同を得 念願かなって赤十字入り

正平2年1347、11月26日、尊氏は1万の軍勢を住吉・天王寺に差し向けました。迎え撃つ正行は、南方の瓜生野に火を放ち敵を追い詰め、逃げ惑う敵兵は大川にかかる渡辺橋に殺到し、大川に落ち多くの兵が溺れました。  
正行は溺れる敵兵を助け、傷を手当し、衣服と武具を与えて京に送り返す平和主義者でした。  
明治に入り、日本赤十字はこの渡辺橋の美談を紹介し、会場万雷の拍手で国際赤十字から加盟を認められました。



ろ

龍覚坊、  
剣術や  
学問はもちろん  
裁縫も  
大事と観心寺中院で教える

ろ 龍覚坊、剣術や学問はもちろん 裁縫も大事と観心寺中院で教える

正成が観心寺の僧、龍覚坊に学んだことは記録に残っています。  
龍覚坊は正成亡き後、湊川の戦いの翌年、延元2年1337、72歳で死去しました。正行は、父存命中はもとより父亡き後もこの龍覚坊に師事しました。  
正成・正行父子ともに、龍覚坊から四恩の教え（親の恩、国王の恩、衆生の恩、三宝の恩）や宋学を基本に、一人の人間として生きる全人格的な人間的教育を受けました。